

記憶が記録に変わるとき

「侵攻1年 見えぬ平和」(二十四日朝刊)のウクライナ。二月の紙面には多くの特集記事が並んだが、中でも映画監督S・ロズニツァ氏のインタビュが異彩を放つ。

この戦争の導火線は、二〇一四年ロシアによるクリミア併合と東部ドンバス地方の軍事支配である。その暴力と民族対立の実態を描いた作品が『ドンバス』、そして一九四一年、キウウでのユダヤ人虐殺の記録に迫ったのが『バビ・ヤール』だ。筆者は二つの映画を見たが、監督の視線は権力に操られ同胞をも辱める人々の狂気に向けられていた。「国家の『神話』は目を曇らせる」(二十三日朝刊)という警句は普遍的な問いでもある。ウクライナで育ちロシアで学んだ経緯から「歴史は複雑。自国の歴史を正確に知る必要がある」(同)と語る。

長期連載「『特攻』のメカニズム」(五日より日曜掲載)が再開された。敗色濃い中、旧満州に派遣された特攻隊員四人の苦闘の記録だ。ロシア軍の侵攻に軍幹部は逃走し隊員たちは捕虜となったが脱走をたくらむ。

「満蒙引き揚げ 波打つ心」(十三日夕刊)は長野県阿智村の満蒙開拓団平和記念館に展示される中国人画家の巨大作品「一九四六」の紹介。葫蘆島の埠頭にひしめく数千人の表情からは生気が失せている。

その葫蘆島の港から帰還したのが浜北在住で九十五歳の長谷川鐵雄さん。十四歳で満蒙開拓義勇軍に志願した体験手記『満蒙開拓と浜松 夕陽の大地にかけた青春』の出版が報じられた(十五日朝刊)。より多くの学びを求め、政府が唱える「王道楽土」を目ざして大陸に渡った少年の夢は敗戦によって潰えた。元浜北市長の長谷川正栄氏は本の「あとがき」で「どの組織に属しているよりも最善を尽くせば報われる」とその不屈の向学心にエールを送る。

満州をめぐる二つの記事。ロズニツァ氏の言う「国家の神話」に翻弄された人々の記憶が、ウクライナ侵攻一年の節目に時空を超えて重なりあう。記憶が記録に変わるとき、私達ちも「神話」を問い直さなければならぬ。(静岡文化芸術大名誉教授)

2023年3月5日

中日新聞(朝刊) p.5